

平成25年6月17日

南の風 38

南部ミニバスケットボール連盟
会長 藤原 敬一

コーチングの続きです。『コーチング』の基本は、『**観察**』することだと書きました。(落合博満氏の著書からの引用) 36号で紹介した、遠越氏も著書の中で以下のように述べています。「まず、コーチングの基本姿勢は、よく見ることだ。じっくりと、正しく選手たちを観察していく。決してあわてない。よいところも悪いところも、長所も短所もよく観察するのだ。チーム全体もそうだ。決して安易にすべてプラス思考で見えていくことはしない。マイナス面も、最悪の状態も予想しながら見て、一つ一つどうすればよくなっていくのかを考え抜くのである。こうしてチームや選手たちがうまくなりだしたら、積極的にプラスの面を伸ばしていくことを考えるのである。」(安西先生の言葉 綜合法令出版社)

また、スポーツジャーナリストの二宮清純氏も、テレビのインタビューの中で次のように述べています。「ふだんからじっと見て、よく観察し、ポイントとなる時適切な言葉でアドバイスできる監督、コーチというのが優れた指導者ではないか」

これらの言葉はミニバスの指導者にとって、たいへん参考になる言葉だと思います。

次に我々ミニバスの指導者が大切にしたいことは、選手(子どもたち)が「自分は〇〇な選手になりたい。〇〇がうまくなりたい。」という目標を持たせることです。選手が自分自身を主体的に動かすようにすることです。自発的に動き、考え、向上、成長していくという姿勢を徹底させることがコーチングの大きな役割ではないでしょうか。

ドリブルシュートの指導を例に挙げます。指導者が、「バスケットボールの基本は、ドリブルシュートだからしっかり練習しましょう。」と取り組ませると、「ドリブルシュートができるようになると、ゲームでこんなにいいことがあるよ。こんな場面で使うといいね。」と言って、取り組ませるとは大きな違いがあります。できるようになった時の「ワクワク感」が全然違います。選手が「やろう。」とする意欲が違ってきます。やらされ練習から自発的な練習への転換です。

もう一つここで触れておきたいことがあります。それは組織(チーム)として、スタッフみんなで指導体制をつくるということです。経験や実績のある指導者が、すべてを仕切り、指導し、決めてしまっただけではうまくいかないということです。最初は権力の大きさから、一応従うかもしれませんが長続きしません。また、すべてを一人で仕切るという組織風土になると、他のスタッフは何も考えなくなり指示待ちだけになってしまいます。落合博満氏も次のように言っています。「私が見ている、このやり方ではまず失敗するのではないかと思うのは、各担当コーチに任せられない上司だ。つまり、各部署の担当責任者に任せられない上司だ。すべて自分でやらなければ気が済まないとか、自分の部下を信頼できない上司はたいがい失敗している。」(『コーチング』ダイヤモンド社)

チームが組織で動く以上、それぞれの役割分担や意思の疎通(監督とアシスタントコーチや各スタッフ)がたいへん重要になります。手段としては、コミュニケーションが大事です。何でも一人で仕切ってしまうと組織は硬直し、船頭(トップ)が多ければチームは迷走してしまいます。我々指導者が今一度、組織としてのチームを振り返って見る必要があるかもしれません。